

030 アジアの死生観（火葬、対話、輪廻）

中村俊哉

福岡教育大学（福岡県宗像市）

死生観は宗教により異なる側面と、文化により異なる側面がある。実際、仏教にはインド文化、中国文化の側面が見られ、イスラム教にはアラブ文化、イラン文化の側面が見られよう。これらと土着文化との混合、使い分けが古来から存在するに加え、都市化、近代化による変化が見られる。インドネシア、インドの folk belief を心理学的に研究することは日本人にとっても有意義なことと考える。

ここで採り上げるのは、土葬、火葬の捉え方（骨を川や海に撒くか大切にまつるか）、死者や祖先との交流や対話があるか、輪廻をどのように考えるか等である。文献法とインタビュー法を並行して用いる。

土葬と火葬、散骨

留学生の火葬に対して、外務省に抗議があった事例（1994年5月17日記事）にみられるように、土葬にこだわるイスラム教は、最後の審判と復活への信仰が背景に見られる。中国では古来火葬を嫌悪したが、インドから火葬が伝わった。インドでは、すでにBC8Cにチャンドーギヤ・ウパニシャッドで、火葬で魂が月に行き、雨となって地に入り、食物となって母体に入ると書かれている。日本では、万葉の時代から火葬が見られる（芳賀）。山中他界観、薄葬思想と融合したとも考えられる。灰を川に流すインド文化、ヒンドゥー文化は、自然（あるいは神、ブラーフマン）との一体化の思想が背景あると思われる。骨を大切にすることは、現在のインドのヒンドゥーにはほとんど見られないが、庭に骨を埋めるという例はみられた。

死者との対話

欧米の視点から見ると、日本人が位牌に向かって語りかける姿は異文化的であり、逆に死者との対話がある日本文化では、死別後のうつ状態が軽いと言うことが可能である。お盆行事で、死者と交流を持つというのが、儒教の招魂思想をはじめ、東アジアに見られる文化様式である。死後は靖国の桜の下で会おうと誓い、今でも死んだ戦友に会いに行く現象が日本で見られる。死者との対話はどこまで普遍的なのかは、今後の究明課題であろう。

輪廻

日本では、必ずしも輪廻を信じる人は多くない。インド文化では、死者は輪廻転生するため、これからの解脱が重要になる。文献学的には、輪廻はBC8Cのブラーフmana文献にも書かれたが、BC700ごろの前述チャンドーギヤ・ウパニシャッドにくわしい。なお、現在現実には解脱というよりも、天界へ行くことを望み、ヴァラナシのガンジス沿いで死ぬことを望むが、天界も輪廻の一つであることが意識されている。文献学的には、この発想は、地獄の情景が描かれるなど来世の観念が悲観的になってきたアタルヴァ・ヴェーダ以降のブラーフmana文献に出てくる（天界で再び死ぬこともある）。

考察

これまでの調査では、一神教、絶対神を持つ人においては、輪廻が否定され、死者や霊との対話は制限される傾向が見られる。しかし、全くないわけではない。文献学的には、古代ギリシャ、ムスリムのドゥルーズ派等でもみられる。これらのテーマには、分からないことが多く、世界的な調査を拡大することが重要であろう。死後の世界のあり方の歴史、分布を知ること、自らの心構えを作ることとは重要と思われる。